

聖書：ローマ6：20～23

説教題：神の奴隷

日時：2015年9月27日

パウロはこのローマ書6章で「聖化」について語っていますが、今日はその最後の部分となります。すでにこの章の基本的なメッセージは前回までのところで語られました。大切な点を簡単におさらいしたいと思います。まずパウロが述べたことは、イエス・キリストを信じて義と認められた私たちは以前とは全く異なる状態に置かれているということです。ある人々は、キリスト教の救いは良い行ないにはよらずただ恵みによって救われるのであるなら、信者は罪を犯しても問題ないのではないか。いやこんな罪人でも救ってくださる神の素晴らしさが益々現れるためにもっと罪を犯したら良いのではないかと考えます。それに対してパウロは、絶対にそんなことはありません！と述べました。なぜかと言えば、信者は今やキリストとの生きた結合の中にあるからです。イエス・キリストは私たちのために死んで復活し、新しいいのちに生きています。そのキリストと結ばれている私たちが新しいいのちの特徴を何ら示さずに、以前と同じ生活を続けるというのは矛盾した話である！あり得ないことである！と述べました。これは言い換えれば、「義認」と「聖化」を切り離して考えることはできないということでもあります。私たちは信仰義認の恵みは信じた時に与えられると教えられています。そして聖化は天国に入るまで続くプロセスだと教えられています。そのあまり「義認」と「聖化」を切り離して考えてしまうかもしれません。しかしキリストを信じるとはキリストと結ばれることであり、その人はキリストが持っているいのちの力に生かされ始めます。ですから義認の恵みにはあずかっているが、聖化の恵みにはまだあずかっていないという人はいないのです。義認にあずかっている人は、同時に聖化の恵みにもあずかり始めているのです。

そしてキリストにある新しい自分を考える際に合わせて心に留めるべきことは、私たちは今や「罪に対しては死んだ」と言われていることです。キリストは私たちのために十字架上で死んでくださることにより、私の上にあった罪の支配を壊してくださいました。従って主を信じ、主とつながっている私に対して、罪は以前の支配権を持っていないのです。私たちはなお地上にあって、残る罪との戦いがありますが、以前のような罪の支配下にはもうないのです。

では今の私たちはどんな状態にあるのでしょうか。前回の 18 節で「罪から解放されて、義の奴隷となったのです」とありました。罪に対して自分をささげるのではなく、義に対して、あるいは「教えの規準」すなわち御言葉に対して、自発的に自分をささげて生きる者に変えられた。もちろん現実にはまだまだ理想状態には達していない私たちですが、私たちの状態は以前とは異なっているのです。そのことを私たちは大いに神に感謝すべきなのです。

この事実に基づいてパウロは 19 節の勧めを語りました。「あなたがたは、以前は自分の手足を汚れと不法の奴隷としてささげて、不法に進みましたが、今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。」パウロはただ「義の奴隷として歩みなさい」と命令したのではなく、あなたがたは義の奴隷とされたのだからそういう者らしく歩め！と語ったのです。まず大切なのは自己理解なのです。たとえば新しく校長先生になった人のことを考えてみてください。その人は事実として校長先生ですが、その姿はどうもまだそれらしくないという場合があります。不用意な発言が多いとか、もう少し毅然とした態度で色々な場に臨んでほしいとか、周りから様々な評価があるかもしれません。しかしだからと言って、その人が今や校長先生であるという「事実」には変わりがありません。事実は事実です。そしてその人が自分は今、校長先生なのだというアイデンティティーをしっかりと持つ時に、その振る舞いは徐々に変わっていくでしょう。パウロが強調していることもそういうことです。自分は神の恵みによって今や義の奴隷となった。これを受け止めるなら、もはやそういう者としての歩みをして行くしかないのです。私たちは感謝してこの御言葉の真理に立ち、なすべき歩みに進んで行くべきなのです。

さて今日の 20 節以降は、19 節の勧めを一層補強するためのものです。原文の 20 節の頭には、「というのは～だからです」という言葉があります。つまり、なぜ 19 節のように私たちは歩むべきなのか、その理由、動機付け、さらなる励ましを語っているのがこの部分なのです。三つに分けて見て行きます。

まずパウロがしている一つ目のことは、読者たちの過去の歩みの振り返りです。20 節に「罪の奴隷であったときは、あなたがたは義については、自由に振る舞っていました。」とあります。「義について自由に振る舞う」という部分は不思議な言

い方ですが、次のように考えると分かると思います。パウロは19節で、人間は「罪の奴隷」か「義の奴隷」かのどちらかであると言いました。従って罪の奴隷であるなら、その人は義の奴隷ではありません。そして義の奴隷ではないということは、義について自由であるということです。つまりこの意味は、かつての私たちは義とは関係のない生活をしていたということです。その当時、あなたがたはそこから何か良い実を得たでしょうかとパウロは問いかけます。パウロは今、「恵みの下にあるのだから、罪を犯そう！」という主張に対して答えようとしています、「罪を犯そうではないか」という発想が出て来るのは、罪の生活が今の私たちにとってもなお魅力的だからでしょう。それは一時的な快樂を私たちにもたらします。自分勝手な欲求を満たす生活は、罪の性質が残る私たちには楽しく感じられるのです。しかしその結果はどうだったのか。そこから何か良い実を得たのか。

たとえば酒に酔う人の姿をイメージしてみてください。呑んでいる時は楽しく、そこに今の自分を満たすすべてがあるかのようです。陽気な夢を見ることができません。ところがその楽しい状態はいつまでもは続かない。次の日には現実に引き返され、二日酔いで頭が痛くなり、自分はバカなことをしたと恥じ入ることになります。これはお酒の場合ですが、私たちは他の色々なことにおいて、これと同じようなことを味わっているのではないのでしょうか。たとえばむさぼりがそうです。色々なものが欲しい。新しい製品を買いたい。それを持てば幸せになると考えて追い求め、購入し、所有します。それで自分は本当の満足を得るかというところがそうはならず、新しいものが出るとまたそれが欲しくなる。それを買えば今度は自分は満足するだろうと思うのですが、そうは行かない。私たちはそのようにして次のもの、次のもの、と駆り立てられ、ふと気が付いた時、次々に無駄な物を買わされた愚かな自分を恥じるのです。あるいはこの手紙の1章で取り上げられた性的倒錯もそうです。今日は益々、性に関する歪んだ情報が流され、多くの誘惑があります。人々はそこに自分を満たすものがあるかのようにおびき寄せられます。しかしその歪んだものに、神のかたちに造られた人間を真に満たすものはありません。それらにいくらかでも翻弄され、駆り立てられた過去があるなら、確かにそれらは今となっては恥を覚えずにいられないことでしょう。他にも色々な罪の歩みがあったでしょう。それを振り返ってパウロは言うのです。あなたはそこから何か良い実を得たのでしょうか、と。それは一見楽しい道であったとしても、結局は何ら良い実を結ばなかった歩みだったのではないか。今となっては思い返すと恥を覚えるような生活だったの

ではないか。そんな無益で、無駄に時間とエネルギーと財を費やす歩みをまた繰り返したいと本気で思っているのでしょうか、と。そればかりではありません。その行き着くところは「死」であると 21 節で言われています。これは地上の最後に迎える死ではなく、永遠の死のことです。神から切り離され、全く希望のない暗闇に捨て置かれる死のことです。このような最後に誰が行き着きたいと願うでしょうか。このことを思うなら、急いでこの罪の道から離れて、「今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい」という 19 節の勧めに従うことへと駆り立てられるべきではないか。そのようにパウロは語っているわけです。

二つ目の彼の言葉は 22 節です。パウロはここで私たちが導き入れられた状態について改めて確認しています。ここに「しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり」とあります。18 節では「義の奴隷となった」と言われていましたが、こちらでは「神の奴隷となった」と言われています。どちらも同じことを指していますが、この両方の言葉があることによって、私たちはより正確に自分の立場を知ることができます。すなわち先に「義の奴隷」と言われましたが、その義とはあくまでも神に由来する義であるということです。「義の奴隷」とは「神に従う奴隷」ということなのです。また反対に私たちは「神の奴隷」と言う時、漠然と神をイメージして従うのではなく、神の義に従うのです。そしてそれは具体的には 17 節に示されていたように、「教えの規準」すなわち神の御言葉に従うということなのです。

私たちは「奴隷」と聞くと、「自由でない」とか、「抑圧された人々」といった否定的なイメージを持ちやすいかもしれません。パウロもこの言葉が限界あるものであることは分かっています。ですから 19 節で「私は人間的な言い方をしています」と断っていました。しかし彼はこの言葉は一つの重要な真理をはっきり表すことができると思ってこの言葉を使っています。それはクリスチャンは神にこそ自分をささげて歩む者であるということです。罪から解放されたからと言ってあとは自分が好きなように歩むのではない。クリスチャンは神に献身する神の奴隷、しかしそのことを喜んで行なう奴隷なのです。そしてこの神の奴隷としての歩みの先に「聖潔」（聖化）があります。いよいよキリストに似た者と変えられるという「聖化」の祝福にあずかるのです。そしてこの最終到達地点に永遠のいのちがあります。ヨハネの福音書 17 章 3 節：「永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」ヘブル人 12 章 14 節：

「聖くなければ、だれも主を見ることはできません。」 神を親しく仰ぎ見るためには、私たち自身がそれにふさわしい状態にまで聖められていなければなりません。私たちは「聖化」の道を通して永遠のいのちの祝福へ入って行くことができるのです。

最後三つ目となる 23 節はまとめの言葉です。まず「罪から来る報酬は死です」とあります。「報酬」という言葉は「賃金」とか「給料」と意味する言葉です。罪の道を進むなら、最後にはその報いとしての「給料袋」を渡されます。その給料袋の中身は「死」なのです。それを見て、これはいらぬとは言えないのです。この道を進んだ人は、永遠に神から切り捨てられる死を報いとして受け取らなければならないのです。しかし私たちの前にはもう一つの道があります。それは永遠のいのちに至る道です。こちらは「神の下さる賜物」と言われています。これは「キリスト・イエスにある」と言われています。神の賜物はキリスト・イエスを信じ、キリスト・イエスと結ばれるところにのみ与えられるのです。そして見て来たように、義の奴隷の道、聖化の道を進むところに与えられるのです。

私たちの前にはこの二つの道しかありません。私たちはどちらを行く者でしょうか。このことを良く考えるなら、15 節のような「恵みの下にあるのだから罪を犯そう！」などといった考えは持たなくなるでしょう。罪の道から救い出され、永遠のいのちに至る道へと移された私たちは、どうしてまた死に至る道に戻ろうというような願いを持つべきでしょうか。むしろ私たちがこの章から教えられるのは、私たちは今や「義の奴隷」「神の奴隷」とさせて頂いたということです。神とその御言葉に喜んで従う心と性質を頂いた者になった。そういう私たちですが、まだ完全に達した者ではないのでなお踏み行くべき道が前にあります。しかし私たちは以前とは大きく異なった状態にある者となったのであり、私たちはこの神の導きを感謝して、いよいよそういう者らしい歩みに進むようにとされています。私たちは自分が導き入れられた恵みの状態と、自分の行く先に置かれている目標とを見失わないようにしたい。神のみわざに感謝しつつ、義の奴隷、神の奴隷としての歩みを一生懸命ささげて行くところに、聖潔（聖化）の祝福があるのです。そしてその道を通してこそ、私たちは最後に、神が備えてくださったキリスト・イエスにある「永遠のいのち」の祝福にあずからせていただくことができるのです。